

報告事項カ

「手紙、作文・小論文コンクール」の審査結果について

「手紙、作文・小論文コンクール」の審査結果について、別紙のとおり報告
します。

平成19年12月21日

鳥取県教育委員会教育長 中 永 廣 樹

「手紙、作文・小論文コンクール」の審査結果について

家庭・地域教育課

文字・活字文化振興法の趣旨に沿い、本県における文字・活字文化の振興に向けた取り組みを進めるため「手紙、作文・小論文コンクール」作品を募集しました。

審査結果等は以下のとおりであり、先日開催した「読書フェスティバル」において表彰式を行いました。

1 手紙、作文・小論文コンクールの概要

主催：鳥取県、鳥取県教育委員会、協賛：鳥取県書店商業組合
募集期間：平成19年7月20日（金）～9月30日（日）

2 応募数 総数701点

<手紙の部>

区 分	応募数
小学1～2年生の部	82通
小学3～6年生の部	243通
中学生の部	133通
小 計	458通

<作文・小論文の部>

区 分	応募数
高校生（専攻科含む）	222点
一 般	21点
小 計	243点

3 入賞者

区 分	入 賞 者
手紙	小学1・2年生の部 角 陽和（米子市立和田小学校2年） ほかに12名
	小学3～6年生の部 種子 文也（倉吉市立明倫小学校4年） ほかに10名
	中学生の部 田中 恭平（鳥取市立南中学校2年） ほかに11名
作文・小論文	前川 佳夏（米子北高等学校看護専攻科1年） ほかに13名

※入賞者及び作品名一覧は別紙のとおり

4 審査会

期日：平成19年11月20日（火）[作文・小論文部門]
21日（水）[手紙部門]

委員：鳥取県教育委員会が委嘱した審査員10名（各部門5名ずつ）

5 表彰式

日時：平成19年12月15日（土）午前9時30分～午前10時
会場：県立県民文化会館オープンスペース（読書フェスティバル開催会場）

6 入賞作品の展示

会 場	展 示 日 程	連絡先
県民文化会館	平成19年12月15日（土）、16日（日）	—
県立図書館	平成19年12月17日（月）～27日（木） <休館：12月20日>	0857-26-8155
県庁ギャラリー	平成20年1月4日（金）～18日（金）	0857-26-7752
倉吉市立図書館	平成20年1月22日（火）～2月1日（金） <休館：1月28日、30日>	0858-47-1183
米子市立図書館	平成20年2月5日（火）～2月15日（金）	0859-22-2612

平成19年度 文字・活字文化の日 手紙、作文・小論文コンクール入賞者及び作品名一覧

賞	部門	部	題名	氏名	学校名(学年)/作者居住市町村名
知事賞	手紙	小学校1 ~2年	大すきなお父さんへ	角 陽和	米子市立和田小学校(2年)
		小学校3 ~6年	お父さん ありがとう	種子 文也	倉吉市立明倫小学校(4年)
		中学生	大きいおばあちゃんへ	田中 恭平	鳥取市立南中学校(2年)
	作文・小論文		私にとって本とは	前川 佳夏	米子北高等学校看護専攻科(1年)
教育長賞	手紙	小学校1 ~2年	天国のおじいちゃん、おばあちゃんへ	垣田 賢伸	八頭町立隼小学校(2年)
		小学校3 ~6年	ぼくのおじいさんへ	土居 皓平	八頭町立大江小学校(5年)
		中学生	ありがとう	三ツ国 弘子	鳥取市立湖南中学校(1年)
	作文・小論文		娘と絵本と私	小谷 直和	鳥取市
奨励賞	手紙	小学校 1~2年	大江小学校みまもりたいのみなさんへ	谷尾 沙耶香	八頭町立大江小学校(2年)
			こうげしよの村中さんへ	中村 光	八頭町立大江小学校(2年)
			大すきなおばあちゃんへ	前田 華子	鳥取市立西郷小学校(2年)
		小学校3 ~6年	ホタルを守っている井塚さんへ	佐伯 晃河	南部町立会見小学校(5年)
			私の大切な人へ	石川 佳菜	境港市立上道小学校(6年)
			大西先生へ	藤原 公平	鳥取市立世紀小学校(4年)
	中学生	今だからこそ	木村 亜梨沙	鳥取市立南中学校(3年)	
		ありがとう	小谷 詩織	鳥取市立湖南中学校(2年)	
		私の大切な人へ	廣瀬 佳奈子	鳥取市立桜ヶ丘中学校(3年)	
	作文・小論文		子どもの頃の作文がいま生きる	三森 政治	日南町
		「星の王子さま」を再読して	岡本 陽平	県立境高等学校(3年)	
		感じ方の変化	福島 季	鳥取敬愛高等学校(2年)	
佳作	手紙	小学校 1~2年	岡田先生へ	依藤 悠加	鳥取市立若葉台小学校(2年)
			ぼくの大切な弟、ゆいとへ	門脇 駿輔	境港市立中浜小学校(2年)
			きゆう食センターのつゆ木先生へ	岡田 直人	八頭町立大江小学校(2年)
			森おかさんへ	浦林 育吹	八頭町立大江小学校(2年)
			はま村のおばあちゃんへ	中原 実玲	岩美町立岩美南小学校(2年)
			お父さんへ	小西 里佳	鳥取市立世紀小学校(2年)
			おかあさんへ	青木 啓太	智頭町立山郷小学校(1年)
			ありがとう、おかあさん	前田 悠衣	湯梨浜町立羽合小学校(2年)

賞	部門	部	題名	氏名	学校名(学年)/市町村名
佳作	手紙	小学校3 ~6年	お母さんありがとう	加河 翔真	県立鳥取養護学校(6年)
			おじいちゃんへ	清水 亮	境港市立外江小学校(4年)
			あなたのおかげで	依藤 奈々	鳥取市立大正小学校(6年)
			ありがとう森さん	田中 彩華	鳥取市立大正小学校(6年)
			なおとへ	岡田 隼太	八頭町立大江小学校(4年)
			大西先生へ	若松 玲奈	鳥取市立世紀小学校(4年)
		中学生	お父さんへ	西田 ゆい	倉吉市立河北中学校(3年)
			お父さん・お母さんへ	菊川 裕子	鳥取大学附属中学校(2年)
			私の好きな人	谷口 知子	鳥取市立南中学校(3年)
			神共	小谷 梨奈	鳥取市立南中学校(3年)
			母へ	白根 千里	日南町立日南中学校(1年)
			山本みちえ様	相本 美慧	鳥取市立用瀬中学校(1年)
			ありがとう	加賀田 悠	鳥取市立用瀬中学校(1年)
	作文・小論文	一番びっくりした本	青木 加緒里	県立鳥取商業高等学校(3年)	
		私たちに必要なこと	村上 遥香	県立鳥取商業高等学校(3年)	
		本から得た成長	乾 楓	県立鳥取東高等学校(2年)	
		出会いを変える出会い	大河原 修	県立鳥取東高等学校(2年)	
		『“It”と呼ばれた子』を読んで	山田 愛子	県立鳥取東高等学校(2年)	
		私と本との関係	杉本 紗智	県立鳥取東高等学校(2年)	
本がある幸せ		山根 美沙	県立鳥取東高等学校(2年)		
本を楽しむ		川端 晶子	米子市		
豊かな感性を取り戻すために		下田 由人	八頭町		

手紙部門:知事賞

小学校1～2年生の部

「大すきなお父さんへ」

角 陽 和(米子市立和田小学校2年)

ぼくは、お父さんの大きなせ中が大すきだよ。お父さんがしごとから、「ただいま。」って帰ったら、ぼくは、一ばんにお父さんのせ中におもいきりとびつくよ。あせのにおいがするよ。がんばったしょうこだね。

春にかぞくで大山と山をしたね。しんどかった。マラソン大会よりくるしかったよ。ぼくは、本とうは、「おんぶしてほしいな。」とおもったけど妹もがんばっていたから、がまんしたよ。お父さんのせ中をずっと見て、のぼったよ。せ中から、「ついておいで。大じょうぶだよ。」と、聞こえてきたよ。

どうしておとうさんのせ中は、ガッチリして、かっこいいのかな。お父さんのだっことりょう手は、妹たちにもう、ゆずるよ。だけど、まだまだぼくも、お父さんにおんぶしてもらいたいな。

きょうも、いっしょにおふろに入ろうね。せ中ながしっこしようね。学校のこと教えてあげるよ。

すみ ひより より

小学校3～6年生の部

「お父さん ありがとう」

種 子 文 也(倉吉市立明倫小学校4年)

八月十六日、いっしょに夏の大三角を見つけに行ったね。車を下りると、見たことない空が広がっていて、ぼくは、本当にびっくりしたんだ。お父さんが、

「あれは天の川だよ。」

って教えてくれたね。そして、デネブ、ベガ、アルタイルを発見したんだ！夏の大三角って宝石みたいにキラキラしてた！一等星って、すごく明るいんだね。流れ星も見られて、ぼくたち、ラッキーだったね。

家に帰ると、

「昔、お母さんが、お父さんにつれて行ってもらった所だよ。」

ってお母さんが言った。お父さんは、お母さんとの思い出の場所に、ぼくをつれて行ってくれたんだね。二人だけの、大切な思い出の場所にね。ぼく、とってもうれしかった。

お父さん、本当にありがとう。

文也より

中学生の部

「大きいおばあちゃんへ」

田 中 恭 平(鳥取市立南中学校2年)

僕は「ありがとう」を九十九歳のおばあちゃんに伝えたいです。

まだ僕がおばあちゃんを見上げていたときからずっと一緒でした。毎日のように絵をかき、ゲームをして遊びました。母さんや父さんが夜、仕事でいないとき二人で寝ました。病気になったときは、付きっきりで看病してくれたし、いろんな美味しいものを御馳走してくれました。おばあちゃんとは、誰よりもながく過ごしたし、数え切れないほどの思い出をつくりました。

今では、おばあちゃんが僕を見上げたり、僕の履き古した靴を使ったりしていますが、九十九歳と思えないほど力強く、かっこよく、やさしいとても大きな大きな存在として僕の中にいます。

恩返しできないほど思い出をもらいました。

本当にありがとう、これからもよろしく。

手紙部門:教育長賞

小学校1～2年生の部

「天国のおじいちゃん、おばあちゃんへ」

垣田 賢 伸(八頭町立隼小学校2年)

いつも、ほとけさまをおがむとき、一回でもいいから会いたくて、ないちゃいます。おじいちゃんが元気にうたっているしゃしんを見て、おじいちゃんってこんなにおもしろくてたのしい人だったんだなあと思いました。

もし、生きていたら、いっぱい話したり、あそんだりしたかったな。プールで50mおよいだところも見せたかったな。

ぼくね、はじめて50mおよいだとき、とてもうれしかったよ。おじいちゃん、おばあちゃんがちかくにいてくれた気がしたよ。天国からプールに来てくれてありがとう。

おじいちゃん、おばあちゃん、天国とお家は遠いけど、いつまでも心はつうじているからね。だから、いつもいっしょだよ。ぼくたちかぞくをまもっていてね。ゆめの中でいいから、会いたいな。

賢伸より

小学校3～6年生の部

「ぼくのおじいさんへ」

土居 皓 平(八頭町立大江小学校5年)

おじいさんの特技は、みんなを明るくすることだね。お母さんにしかられたり、兄弟げんかをしたりした後、ぼくは、なぜかおじいさんのねどこにもぐりこんでしまうんだ。なぜか安心するんだ。おじいさんの毛布にくるまってじっとしていると、ぼくの悲しい心が少しずつとけていく。だんだん元の心にもどっていくんだよ。

おじいさんは、お笑いのようなおもしろいことは言わないけど、そばにいる人は不思議と笑顔になっているんだ。きっと、おじいさん自身がいつも笑っているからだよ。そのにこやかな顔で人の心をおだやかにしているんだよ。ぼくなんか、おじいさんがすわっていたいすにすわるだけで、魔法にかかってしまう。不安な心が、うすれていくんだ。

おじいさんは、ぼくの心のおくの大黒柱なんだ。だから、いつまでも元気でね。そして、にこやかな笑顔をこれからもよろしくね。

おじいさん、ありがとう。

土井皓平より

中学生の部

「ありがとう」

三ツ国 弘 子(鳥取市立湖南中学校1年)

私が今一番ありがとうといたいのは、お絵かきの先生です。先生はいつもわたしが教室から帰る時に、「弘子ちゃん、今日もみんなのお世話をしてくれて、ありがとう」と言われます。教室には、ダウン症の友達やじっとはしてられない友達がいっぱいいます。その子たちはさわいでいるのを注意したり、困っているのを手伝ってあげるとすごくいい笑顔を返してくれます。そして私はとても幸せな気持ちになります。だから私は先生にこんな幸せな気持ちにさせてくれて、「ありがとう先生。私をいつも認めてくれて。」と心の中で言っています。私がまだ保育園の頃、友達がいなかった時、先生が絵を書きながら優しく遊んでくれました。だから私はこの絵の教室に行って、先生や友達の笑顔に会えるのが楽しみです。これからもよろしくね。

作文・小論文部門:知事賞

「私にとって本とは」

前川 佳夏(米子北高等学校看護専攻科1年)

私が読書を好きになったのは、ここ最近のことである。きっかけは、ある人との出会いだった。彼は読書がとても好きで、私に本の奥深さや、本を読むことにより視野を広げることが出来ること、また本は多くの日本語を学ぶことの出来る、素晴らしいものであることを教えてくれたのだ。

彼と話しをする中で、あまりに自分の無知を恥ずかしいと思った。そして、私は無性に本を読みたくなり、早速図書館へと足を運んだ。

以前から興味があった、死生観についての本を手にとった。アルフォンス・デーケンが“死への準備”の必要性を説いた本であった。私は死について、ネガティブなイメージしか持っていなかったが、本を読み始めたとたん、私が抱いていた死へのイメージが一瞬にして崩れたのだ。“死を考えることは、生を考えること”であり、“幸せに満ちた死への準備”の必要性を感じた。私が思い描いていた“死”というものとかけ離れた視点で、驚きと同時に本の素晴らしさに感動し、彼からの教えの意味を悟ったのだ。

それ以降、私は図書館が大好きになり、常に肌身離さず本を持つようになった。本を読む度に新しい発見があり、新鮮な気持ちにさせてくれる、本の力はすごいと思う。

私は今、国語辞典を読もうと計画中だ。たくさん日本語を勉強したいからだ。ことわざにしろ、四字熟語にしろ、古人が残した大きな遺産であると思う。人間の本質や生き方、道徳をこれ程までに的確に記したものはないだろう。だからこそ、学べる時に精一杯勉強して、自分自身の“生きる力”としたい。

そして、私に本の素晴らしさを教えてくれた彼と、お互いの経験を混じえて、本の素晴らしさを語り合いたい。周りの人たちともこの感動を共有し、本を通してたくさんの人と出会い、人間的に成長していきたいと思う。

作文・小論文部門:教育長賞

「娘と絵本と私」

小谷 直和(鳥取市)

娘の一才の誕生日に絵本をプレゼントした。「絵本との出会いはとても大切だ。」と聞いていたので、複数の出版社の絵本カタログとにらめっこしながら、これはぜひ読んであげたいというものを選んだ。

どれもすてきな本ばかりなので目移りしてしまう。気付けば十冊もの本を購入することとなった。

十冊のうちでも、私が読んであげたい本と娘のお気に入りとは、全く違っていた。娘は、動物ものか、展開のシンプルなものを好んで読んでくれとせがんだ。繰り返し繰り返し読んでいると、本を開かなくても覚えてしまう。こちらがいくら眠くても、本に顔を押し付けてくるので、暗唱したこともあった。そんなときは決まってぐずぐずし出した。娘にすれば、いいかげんなことしないでちゃんと本を開いて読んでほしいというサインだったのだろう。次からは、寝ているときには本の角を顔にぶつけてくるようになった。

絵本のすばらしさを知ると娘の要求はどんどん増えていった。中でも一番のお気に入りには、エリック・カールの『はらぺこあおむし』だった。絵のすばらしさもだが、絵本ならではのページの作りが気に入ったようだった。「そして、げつようび、りんごをひとつみつけて、たべました。」から始まる一週間をとても喜んで見ていた。あおむしが食べた穴に小さな指を入れてページをめくろうとするので、すでに厚目のページも痛んできている。それでも飽きることなく読んでくれとせがんでくる。

子どもと絵本との出会いは、私と絵本との出会いでもあった。絵本の世界を通して、子どもともより触れ合うことができたし、子どもも本を開こうとするようになったことをうれしく思う。これからどんな新しい絵本に出会えるか娘といっしょに楽しみにしている。